

或る留学の記録。：イタリア・アカデミアの授業形態と教師像

THE SPAGHETTI ACCIDENT : Studing at Academy of arts in Italy

桑原恒和

Tsunekazu Kuwahara

1989年、昭和の年号が平成元年に替わった時、私はまだ日本大学芸術学部美術学科彫刻研究生の1年生でした。昭和天皇が御亡くなりになり、その葬式の列が東京を走るとニュースで知り、その歴史的な光景をやはり見ておく可きだと思い、狭い学生のアパートから飛び出したことを覚えております。なるほど、通りに出て見ると設置されていた各スピーカーから重々しい苦しげな曲が辺りを別の風景に変えていました。そして黒塗りの車の列、静かに泣く人など或る時代の替わり目を煙草も吸わない、物も知らない空想家であった若い自分でも感じたことを記憶しております。その当事私は、今は亡き彫刻の恩師土谷武先生の前で金属彫刻に没頭しておりました。先生のような無二の師の傍にいたことの喜びを当時は一杯に満喫しておりました。私の父が画家であったことから幼少より美術館へ連れられ、何も無い伽藍としたギャラリーの空間へ作品を置き、周りの空気を染めてしまうという、何とも自由で又何とも存在感の有る生き方から、父とは違う分野でそれをしようと、又小さい頃から気になっていた立体の見え方について例えば冷蔵庫を床から見上げた時に素敵でモダンなビルディングに見えた幼少の記憶など、そんなことから敢えて漠然としたまま彫刻家になりたいと思い始めたのです。そのことから日大へ行き、本物の彫刻家である土谷先生に巡り会い、御指導を頂いたことは正にこの選択に骨を与えられたように思いました。先生の横で、先生は金属でクールな表面を装いながらも計画性を持った熱い彫刻を創られている。それに対して自分の作品は情熱を情熱のまま破滅的なまでにその熱さを表現しようと心の奥底では密かに挑戦しておりました。そして先生がパリに留学していた時の話を聞いた時に私も毒を食らわば皿までと思ひ海外へ出ようと思え始めたのです。(先生がパリにいた時の話で面白かった話の中には実存主義者のジャン・ポール・サルトルがカフェでとても気持ちの悪い印象だったことや、イブ・クラインが当事、流行作家であったことから絶えず複数の女の娘達に囲まれて通りを闊歩していたことなど学生であった私には何ともリアルにその情景を思い描きました。)そしてさあ海外へ出よう、しかし一体どの国へ学びに行くのかと考えた時、私はやはりローマで学ばれた日大芸術学部絵画科の樋口先生に卒業で言

われた「君はイタリアへ行った方が良いよ」という言葉から、何となくイタリアに興味を覚え始めました。そして当時の西武美術館で観たイタリアのトランスアバンギャルドの作家達ミンモ・パラディーノ、クッキ、クレメンテなどの作品から当事のアメリカの作家ジョナサン・ボロフスキーの自由で徹底的な内的個人表現とは違う、何か歴史のベース、それを持ち、そしてそれを取り入れる事による或る深みを感じ取り、益々イタリアではないだろうかと考え始めました。しかし正直な所、日大芸術学部のヨーロッパ研修旅行に参加した時にはイタリアとスペインは他人(実は旅行者)をじろじろと見る不躰で嫌な国だなという印象でした。それでも尚あの建物のボリューム感、彫刻の白い厚み、カーブの美しさ、そしてあのラテンの好い加減さなどをイメージし、やはりイタリアへ行こうといよいよ思い詰めたのです。実際、土谷先生も私がイタリアへ行くと言い出し始めて暫くすると先生もどこからかイタリアの美大、アカデミア(正確には美術学院)の情報を集めて下さり「桑原、アカデミアの設備はひどい物らしいぞ」と忠告して下さいましたが火照っていた私は意にも介しませんでした。しかしこの設備が整っていない事(例えばアカデミアでは鉄の素材を全て人力で切りました)又前述のラテンの好い加減さ(或いは良い加減さ)等もこの国に留学する大切なキーワードとなります。研究生一年の私はどうせ伊語による会話は無理だろう、ならば作品でと思い朝8時から夜8時まで金属彫刻に明け暮れました。そして二年からは伊語の教室に通い出し、最終的には四つの教室で学ぶようになりました。何故なら溶接でしばしばする目で辞書の細かい単語を調べれる事がとても難しくなり、一転して語学だけを集中して勉強することにしたからです。こうして1989年の4月には研究生を修了し、同年9月のアカデミア・ディ・トリノ(国立トリノ美術学院)の入試に備え、3ヵ月間によるフィレンツェでの語学留学へと旅立ちました。その引越しの際、6年間住んだ東京から名古屋へ向かう新幹線がそのビルの谷間から抜ける時、とても寂しく思った事や、又成田空港では飛行機の窓から外でタイヤの整備をする人達を眺め、日本へ帰ってから本当に仕事に就けるのだろうかと考えたことを思い出します。そしてその3ヵ月間の語学留学は、気付い

て見ればイタリア語で話をしていたイタリア人は殆ど学校の教師だけだったと言っても良い程でした。やはり滞在期間が短い事、そして何より語学のレベルがやはり、その程度であったと言わざるを得ませんでした。しかしその分語学学校を飛び出し、ミラノのスカラ座へ行ったり美術館や人混みの中に混じり言葉も解らないまま直感的にイタリアの空気を感じ取るようにしていました。

お喋りな受験生。1989年10月、イタリア北部の工業都市トリノに於いてアカデミア受験の当日の朝、真っ直ぐ学校へ向かって良い物の、途中のBARに寄り道し、カウンターの奥にいたバーテンダーに声を掛けたことを覚えています。「私は日本から来て、今日これからアカデミアの受験なんだ」と。するとそのバリスタは「準備はしたのか？それじゃ絶対大丈夫だ」と言ってくれました。こんなように受験前に高揚し、日本とは違って言いたいことはバリバリ言うようになっていた私はイタリア人にとって、とても解り易い外国人になっていたのかも知れません。しかし、そのバリスタの当たり前の言葉から後に、イタリアで生活する時の基本的な心構えを学んだことになりました。他のヨーロッパ諸国の人がイタリアについてアルプスを越えたらもうアフリカだというのを良く耳にしました。アフリカの人達には申し訳ありませんが、それ程イタリアはバナナ共和国つまり政治も社会もめっちゃくちゃという、重ねてアフリカ人の社会ではそうであって欲しくないようなイメージを持っています。そして事実、場合に拠ってはそれ程までに疑って掛かっていた方が良い位、イタリアから何かを手に入れる場合（例えば滞在許可証、卒業証書、単位など）兎も角その準備に準備を重ね、何の不備や落ち度が無いよう(impeccabile)にすることが、特に日本人にとっては予想不能な局面に落ち入り易いこのイタリアで唯一、物事が滞り無く進むということを学びました。実際人種差別的、外国人嫌いな先生から単位を取る事など日本ではそんなあから様な教師が存在すること自体、イメージし難い物です。しかしここはイタリア。嫌いな物は嫌いとはっきり言うことが逆に偽善の無いことの証明であり、私も勿論すぐにはありませんでしたが段々鍛えられて行きました。一つ忘れられない出来事があり、それは卒業を控え論文をいよいよ先生に提出する日程を決めることとなり、学生課の職員によると先生は夏休み前に登校されると言いますが、私は危ないなと思いその日程を直接先生に御話ししたいから先生の電話番号を教えて

欲しいと申し出ました。すると学生課の職員は、生徒に先生の電話番号はとても教えられないと言い、仕方なく半信半疑のままその日を待ってましたが、案の定、その先生は当日現れませんでした。素晴らしい先生ですが何か感情の一つ、ちょっとした理由の一つでわざわざ学校まで生徒の論文を見に来ることもやめてしまうのがイタリア流です。結局バカンスを含めて2~3ヵ月を余分にイタリアに滞在しなければならず、お金の無い学生に取っては又大変な出費となりました。このことからイタリアで何か大切な事をする場合、念には念を押して掛からなければならないと絶えず武装していたと言っても良い程慎重でなければなりません。それでも尚かつ何か不備が見つかった場合、そこからがイタリア流ネゴシエーションの場面へと入ります。兎に角喰らい付き、相手の言うことを聞きながらも聞き流し、自分の言いたいこと、欲しい事柄を一生懸命交渉します。勿論イタリア流ですので当のイタリア人も日に何度も、或いは毎回こなしている程馴れっ子ですので、やはりどんなに粘ってみてもダメな時はNoです。しかしあややはりイタリアだと思う程、融通の効く場合もあります。しかしそれはそれでもある程度準備が整っているからこそ始まる話なのです。当たり前のようですがイタリアだからといって何も準備もせず、それでも通るといったようなイージーなイメージを笑い話にしている人を多く見掛けますが実際はそのイージーな雰囲気の中でも、一本一本杭を打つようにして行かなければならないのです。そしてそれでも尚、意外な理由からダメだという場合もあるからなのです。ところで私はどうしてトリノ・アカデミアにしたのかと申しますと、ミラノ、フィレンツェ、ローマのアカデミアは学生が一杯で入れず、一年間待たなければならないなどと誤った情報を聞いていたからです。しかしそれは'70年代の話であり、私の行った'90年代にはその問題はとうに解消されており、私はトリノ・アカデミアに入学した後、当時の学生達による学校改革と合わせてそれを知らされました。イタリアの大学は国立しか在りません。その為、学費も極端に安く、年間一万五千元も払ったかなという程度であり、しっかり単位と点数を取っていれば割合簡単に特待生になれ、するといよいよその年は学費すらも払わなくて良くなりました。確かに一週間弱に及ぶ入学試験は在りますが、誰でも難しいと思われる医学部や建築学部でも、希望する学部に籍を置くことが出来るのです。しかし単位を取り、

進級し又卒業するという事は日本でも知られているように別物であります。実際私も他の多くの留学生のようにアカデミアに籍を置き、その大学内で制作をし、展覧会でもすればそれで良しと始めは考えておりました。しかし大学が国立であることから今度は逆に経費節約の為、工房も限られた時間しかその扉は開かれておらず週に一日半もしくは二日開いているかどうかというような状況であり、そうでない日は常に鍵が掛かっており、他の授業を受けず自分の制作をする場合は、学内の中庭で木彫をすることにしていました。(フィレンツェ・アカデミアでは、隣りのアカデミア美術館所蔵のミケランジェロ作によるダビデ像の後ろで。) そんな或る日、やはり中庭でのみを振るっていると、イブ・モンタンに似たシチリア出身の彫刻助手の先生から、その木槌の音がうるさいなどと言われ、とうとう私は友人のドイツ人版画家に相談し、フィレンツェ郊外、赤ワインで有名なキャンティの農園内に在る納屋をアトリエとして借り始めました。そこはフィレンツェからオートバイでシエナ方面の高速道路に乗り、40分程掛けて暑い日も、寒い日もアトリエに近くなるにつれ、葡萄の木々の間を抜け、石の多い凸凹道の上を、細いタイヤで振れながら通っていました。周りには昼間でも誰もいないトスカーナの農牧地帯、暖房も無ければ始めは窓すらも無かった納屋の中で一人コツコツと木を彫っているという何とも修行僧のような閉ざされた毎日を送っていた事を思い出します。しかしその当時の体験で特に素晴らしいと思ったことは、そのアトリエの扉を開けていた時は緑色の草と茶色の物置きが目の前に在っただけで、周りには誰一人としていなかった筈なのに、今度は制作後、又扉を開けて見ると辺り一面真っ白な羊達で一杯だったのです。宛ら雪が降ったかのような景色でした。これ程たくさんの羊達が坂を登り、ここ一面に広がり、物音一つせず目の前にいる姿を見て、それは何とも神秘的で、彫刻家ヘンリー・ムーアが言うように動物の持つ或る貴高さを感じ取りました。しかし毎日このように農園に潜り、アカデミアの授業も疎遠になり掛かっていた或る日、遅蒔きながらはたと、こんなことはいつでも出来る、又どこでも出来る。イタリアにいる時はやはりアカデミアの授業を全て受けようと、木洩れ陽の下ひどい農道に揺れる黒いオートバイの上でそのことを考えました。それからはこのアトリエを引き払い例え大学内での制作時間が減ったとしても、敢えて、全ての授業、科目を受けてみようと思

を括ったのです。何故かくもその制作時間に拘泥ったのかというと、日大芸術学部江古田校時代、そこはとても制作至上主義の気風が強く、それは最高の設備を使いながらも狭い場所の為、朝早くからその場所を取り合い、長く粘って他の生徒にその場所を譲らなかったという程だったからでした。そしてこの時の決断は後に計4回、期間にして1年間のアカデミア在学中、そのバカンス期を使いアメリカ、ニューヨーク最古の美術学校ザ・アート・スチューデント・リーグ(ジョージア・オキーフ等アート・スチューデント・リーグ派を輩出した学校、又画家国吉も教えていました)に於いて受講、制作活動することによって益々イタリアで学ぶべきアカデミックな学問の貴重性を再認識しました。イタリアでは学問、N・Yでは自由な制作という理想的な環境は日本へ帰る旅費よりも安く、N・Yでも最低なペンションに住み、出費を出来るだけ控えることからこれを可能にしました。そして毎日N・Yの学校で一枚畳一畳もある白い紙の上で何枚も踊るように、体操をするように全身をのびのびと使いながらドローイングをし、そしてその前にはほぼ限らず午前中、メトロポリタン・ミュージアムへ近くの路上で落ちている入場用バッジを拾った後、ギリシア・古代ローマの彫刻作品の優美さ、端正さを見、アジア・アフリカ彫刻からはspontaneousなエネルギーを感じ取るようにして毎日毎日、目に見えて消却して行くインスピレーションを絶えず補って行かなければなりません。そしていつも学校の帰り、カーネギーホール近くからダコタハウスの近くにあるペンションまでデッサンロールを抱え、セントラルパークの横を満足し切って歩いて帰ると、こんな大都会でも私も何かデッサンで参加しているぞといった気分になっていました。N・Yでは何か新しいセンス、アプローチ(取り分け商業的でもありますが)ああこれがその後日本やイタリアでも流行るのだなと思うことがいつも感じておりました。又アメリカに住んでいる友人からそれはとてもヨーロッパらしいと言われたことは、フィレンツェではアカデミアでの制作後、汚い格好のままアパートまで帰ると、途中の路上でたびたび不愉快な思いをすることが多かったのに対して、N・Yでは逆に汚い格好のままにいることの方がより安全で自由でいられるといったことでした。ちょっと面白い話ではイタリアの美術学校の友達に、これからN・Yへ行くよと言うとそれは危いと言われ、今度はN・Yの美術学校の友達に、それじゃあイタリアに

帰らなきゃと言うとそれは危険だと言われたことでした。トリノ・アカデミアの受験当日の話からフィレンツェ、N・Yへと話が飛びましたが、私はトリノ・アカデミアよりイタリア国立美術学院アカデミアに入り、1年後フィレンツェ・アカデミアへと移籍をしたからです。(日本の履歴書上では再入学となります) トリノで取った単位を持ってイタリア国内のアカデミアであれば移動することが出来るのです。前述のフィレンツェ、ローマ、ミラノ・アカデミア入学に関する'70年代の話を真に受けヴェネチアでもきっと同じ状況だろうし、ナポリでは或いは呆けてしまうかも知れないと思い、ミラノの隣りトリノに決定しました。そして30才台半ばのエレクトロニクス関係のエンジニアの男性宅の一部屋を日本語を教える代わりに無償で借して貰えるという条件で、トリノに住む場所も見つけました。彼は実際トリノの出身ではなくカラブリア、南イタリアの出身であり、当時住み始めたトリノ郊外の街ニッケリーノは程無くして彼と同じように南部イタリア人が多く住む地区だと解りました。一般的にイタリア人(正確にはイタリア人という呼称の歴史は浅く、1861年にモザイクのように分散していた独立都市がイタリアとして一つの国家になりました。)から見て余り評判の芳しくない都市の人達として良く言われるのがトリノ人は閉鎖的、ミラノ人は余りにビジネス・ライク、そしてフィレンツェ人はお高く留まった鼻持ちならない人達というのが通説です。ミラノには住んだことがない為、はっきりとしたことは言えませんが、まずトリノ人に関してそれは北イタリアの寒い地方の人達であり、山間に住む人達のように最初は決してオープンではありませんがお互いに知り合っていく度に、とても暖かく受け入れてくれる人達でした。そして今度はフィレンツェ人に関して言えば、やはりその先祖にダ・ビンチがいる、或いはダンテがいるといったように、彼らがフィレンツェという都市を文化の揺り籠だと自信たっぷりに自慢するのも無理はないことと思います。(幸運なことにフィレンツェ市は岐阜市と、そして2005年にはトリノ市は名古屋市と姉妹都市になりました。私は現在その両都市で美術、イタリア美術史を教え、各産業の伊語通訳、翻訳そして伊語講師をしております。又愛知万博のイタリア担当ホスト都市の伊語教育活動も行いました。嘗て留学したイタリアの両都市が揃って日本の故郷と姉妹都市になったこと程嬉しいことはありません。) そのことから例えばフィレンツェ・アカデミア

に通う学生とは極端に言えば絵画コースであれば、ボッティッチェリ、ジョット等、彫刻で言えばミケランジェロ、ドナテッロ等のルネッサンスに当たる巨匠達の作品を間近に見て育ち、事に拠るとそれ以上の作品を作ってやるぞといった勇敢な学生か、もしくは高校を出た後、仕事が見つかるまでの腰掛け的にアカデミアに通うといった学生達とその中間といった所かと思われました。最近仕上げた繊維業界の翻訳文の中で面白いテーマが在りました。それはスタンダール症候群と言って圧倒的な作品や、余りに素晴らしい芸術作品を立て続けに見たりすると感動の余り、吐気を催したり、頭痛がするといった症状であり、取り分け素晴らしい大作品の多くは見上げる姿勢を強いられることが多く、そのことから又脳の一部と神経を押し続けることもその原因の一つであると聞きました。このような圧倒的な作品群に囲まれても尚かつ無気力になったり、或いは虚脱状態になったりせず(フィレンツェに於ける現代アーティストは絶えずそれと闘っていることでしょう)あくまでも美大に通い、芸術を学ぼうという姿勢はやはりそこに職人的、工房的な気質、風土があったからかも知れません。ほとんど全てのルネッサンスの巨匠達も驚く程若い頃から工房で修行をして、技(アート)を養って行っていたからです。Devi mangiare il tempo(直訳で、君は時間を食べなければならぬ)或る日フィレンツェ・アカデミアの彫刻教室での授業中、嘗てこの教室に学んだ留学生在が故郷の南米からフィレンツェに立ち寄り、教室とそのフマーズィ先生をシャンパンを携え訪ねて来ました。すると先生は彫刻教室の全生徒に向かってI signori scultori!!と呼び掛け、その紳士的な彫刻家達という呼び掛けの響きに、嗚呼イタリアに来て良かったと思いました。完璧主義は敗北主義、唯一完璧なのは神であり、我々人間は永遠に不完全な物であり、だからこそbestを尽くす。そしてそれは我武者羅にbestを尽くすということではなく、完璧にはなれないことを知っている上での最善、最良を目指すというエネルギーと言っても良いでしょう。私はクリスチャンではありませんが彼らのこの考え方は大好きです。さて話を又、トリノに戻しますと結局アカデミアに於ける日本人留学生は私を含めて二人しかおらず、迎いを見渡してもほとんど日本人がいなくて良い所でした。それは前述のフィレンツェ・アカデミアとは大いに違った点でした。そのことからアルテポーヴェラの一中心地そしてファシズムの生まれたこの少し

変わった都市トリノに留学した貴重性が段々と解って来ました。イエローページを開いて見てもそこにはローマン・カトリックの総本山を頂くイタリアの一大都市でありながら黒魔術関連の番号が並び、中心地に在る門やモニュメントの彫刻等は日く在りげにあらん方向を指し示し（一説では秘密結社フリーメイソンに因る物）、プラハ、ロンドン、トリノによる三角地帯では天使と悪魔が交わる所とも言われ、聖堂に保存されているキリストを包んだと信じられていた聖骸布は近年の研究で一緒に保存されていた鉄の杭とは時代が合わず偽物となり、ナポレオンがエジプト遠征の際、分捕って来た膨大な美術品が結局フランスへ越えることが出来ず現在このトリノで観れることなど、他の明るいイメージのイタリア像とは全く違った不思議な雰囲気を持った都市でした。そしてもう一つトリノを代表する顔が重工業都市であるということです。暗い夕方のメンサ（食堂）で見た身寄りもなさそうな一人の老人が食事を取っている姿はピカソの青の時代の作品のようにリアルで寂しく、ネオリアリズムの伊映画そして何より、ここトリノがスタインベックの「怒りの葡萄」のイタリア版、南イタリア人による家族全体の移民を描いた映画「にがい米」の舞台であったことを思い出し、この側面にも注意してこの街を観察するようにもなりました。駅の構内ではこんな外見、容姿のアジア人もいるのかと驚き、警官が銃を抜いたまま私の電話ボックスの後ろを走り抜け、モロッコ人が別のモロッコ人の首の付け根に包丁を突きつけ、セネガル人が明らかに前の晩、体を販いで得たお金で市場で食料品を買うというこんな殺伐とした雰囲気の中、一人のアフリカ人の労働者が故郷へ持って帰るおみやげをウィンドーの中に覗き込み微笑んでいる姿を見ても観光の都市ではない、リアルなトリノを実感しました。そしてこの世界中から来る労働者達、そしてストライキの列を縫って路面電話でアカデミアに通います。花の都フィオレンツァ（フィレンツェ）での華やいだ留学環境とは正反対の、水分を持った脳みそが凍ってしまうんじゃないかと思う位寒くて、現実的なトリノの環境は幾つかの灯火のような真実を私に見させてくれました。トリノ・アカデミア入学と略同時に私は夜、ピエモンテ州立東洋研究所C.E.S.M.E.Oで国際交流基金の教科書を使い主に社会人を対照に日本語を教え始めました。そして私は二人の貴重な人達と知り合えました。一人は高校の教師である30才代後半から40才代の男性で主にラジオより聞きな

がら日本語を独学し、私の授業中に於いても鋭い質問を繰り返す私自身が本当に勉強させてもらった人物です。彼は10ヶ国語以上を識り、通常周りから天才と呼ばれておりました。一度部屋探しの為彼と彼の母による二人暮らしのアパートへ案内されましたがそれは正しくゴッホの部屋のようなものでした。壊れたメガネ、破れたコートそして毎回授業の後、やはり歪んだ自転車を漕ぎながら暗くて重いトリノの夜景に消え行く姿が印象的でした。自分の身の丈で生きることの出来る国、個人主義から他人の個性を認め合い、そのことから誰も肩を叩いてそれじゃダメだとか余計な干渉をせず、既成の価値観に閉じ込めようとしないう、天才が天才でいられる国。その意味では一生懸命他人に合わせんと努力しがちな我が国とは異なる生き方、育ち方をした人物達と間近に接することはいつも刺激的でした。そしてもう一人の生徒はインド系イタリア人の或る障害を持った女の娘でした。年齢は20才から半ば位いでしょうかある日その生徒にどうして日本語を勉強するのかと問いかけて見ると、彼女の父は日本人、母はイタリア人であり世界中の身寄りの無い子供達を養子にし、家族として暮らしていること、そしてそんな父親を誇りにし日本語を学びたいというのがその答えでした。この日本人のほとんどいないトリノにそんな素晴らしい同国人が住んでいるのかと驚きとても感動しました。それにしても一体どうしてそんな素晴らしい人物を日本のメディアは採り上げたり、紹介することが無いのだろうかと考え始めました。何故ならそれ程の人物ならイタリア関連の情報の中で疾に、或いはトップとして私の耳に入って来る可きです。悪貨は良貨を駆逐するといいます。それは良貨は大切に仕舞われ、結局悪貨だけが表に出廻るといった内容ですがこのことから本物の人物はそのクオリティを保つ為にも、決して表にはしゃしゃり出て来ようとはしない筈であり、世間に流布されている悪趣味や詰まらない物はそれが由に是くも目に付くこと、一見して良い物、真実の物が全く無いように見えるばかりか、偽物ばかりに囲まれてしまっているように見えても、この世の中には確実に素晴らしい物が存在し、特に本物の人物に関しては探し出す程の努力をしない限り到底見つけることも出来ないんじゃないかと考え始めました。その後日本へ帰り、あるクオリティの高い自動車関係の雑誌の中の写真に彼女とその一家を見つけました。彼女の父はフェラーリ社の創始者である故エンツォ・フェラーリ氏にとっても近い友人であり、や

はり自動車関連の仕事をする大人物だったようです。このことから世間に惑わされない、良い意味での個人主義のスタンス、在り方を学んだのかも知れません。さてここまでが日本からイタリアまでの、決心からカルチャーショックまででありこれからトリノ、フィレンツェ両アカデミアに於ける授業風景、課目の解説、各教師像の紹介へと進めます。私の7年間に及ぶアカデミア留学中ただの1回だけに限り筆記試験があっただけで、試験は通常全て口頭試問で行なわれ、それが故に授業内容をきちんと把握し、質問に対して的確に答えて行かなければならないといった形式であり、私も日本に帰り、大学或いは各専門学校での作品提出時にもこのスタイルを取り入れるようになりました。どうしてこの作品を作りたいのか？どこが制作して面白かったのか？どんな意図が込められているのか？等の質問にそれを置き換え、生徒達は的確に自分の作った作品、狙い等を答えなければなりません。怠慢さからか、或いは、全く自身自身を正確に言い表わそうという訓練、教育を受けていない為か、中にも面喰らってしまい、しどろもどろに重い口を開くといった生徒もいます。残念ながらこのことが日本の社会に取って有益なのか、それともさほど有益ではないのか未だ図りかねる所ですが、N・Yの人達のように知ってなくても取り敢えず手を挙げるといったような超積極性を持った人達は極端な例として、人格を持つ一人の個人として世界の人達とコミュニケーションする場面に於いて少なくとも自分の制作した意図や作品に関しては或る程度物の言える人物になって欲しいからです。何故お金も有り、食べ物にも困らない筈の日本人は肝心なことが身に付いていなかったり、教えられていなかったり、或いは持っていなかったりするのでしょうか。そして何が本当に大切で、それ以外はそうでもないといった基準がすっぱり抜けていたりするのでしょうか。無責任で野放しな嫉の連鎖でこうなったのでしょうか。端無いことや恥ずかしいことが繰り返しメディアを震わすにつれ、それらがどんどん日常的、一般的になり、どうでも良いことがどんどんエスカレートして行ってしまうように思われます。buon senso良い趣味、良識は残念ながら近年イタリアでも様変わりをしているように見受けられますがしかし決して日本のように不毛ではありません。そこで取ってこの日本でも良識を實踐し、自身のクオリティーを保ちながら与えられた機会に於いて、良い教育を目指して生徒達に接して行きたいと私は心から願っております。

す。素直であるということは大切な事です。取り分け教育者になる人達に教える場合には、そのことに重点を置きます。海外留学中、イタリアではこれで良いのだ、或いは日本ではこれで良いのだと周りをごまかし、結局自分に都合良く、したい放題をしている人達に出会いました。日本で正しいことがイタリアではそうではなく、又その反対も多々ありました。すると二つの正しいスタンダードとぶつかり、難しい選択を迫られます。結局それは今でも私にとって未解決なテーマとして残っている物も在りますがそんな問題にも素直にぶつかって行くことから理解して行くのです。私は成長を偽ることが嫌いです。又素直に自分自身の発展を受け止めたいとも思うのです。

イタリア国立美術学院アカデミアの授業形態として、それは基本的には4年間で終えることの出来るカリキュラムであり、プラス1年間でじっくりと卒論を準備するというのが一般的であり、彫刻コースの必修科目としては毎年①彫刻、②美術解剖学、③美術史があり、その他の選択課目として、④教育学、⑤写真学ⅠとⅡ、⑥マスメディア論、⑦修復学、⑧絵画技法ⅠとⅡ、⑨現代美術史ⅠとⅡ、⑩演劇史ⅠとⅡ、⑪彫刻技法ⅠとⅡ、⑫大理石による実材実習、⑬企画、デザイン学を私は選択致しましたが、その他に⑭舞台美術学、⑮ブロンズ鑄造実習、⑯舞台衣装学などの課目も在り⑭舞台美術学と⑯舞台衣装学については学びましたが単位を取ることが出来ず⑰ブロンズ鑄造実習に関してはその狭い教室から定員制を取り、私は⑫大理石による実習を選びました。それでもやはり単位の取れなかった授業程、印象に残っていることから⑭と⑯そして⑮の課目から紹介します。⑭舞台美術学の授業とは、イタリアのハリウッドに当たるローマのチネチッタで正にイタリアの奇跡と言われた'60年代の経済成長期に活躍されたズィコウスキー先生による授業であり「甘い生活」に代表されるその当時のフェデリコ・フェッリーニ監督やロベルト・ロッセリーニ監督、俳優マルチェッロ・マストロヤンニ氏などの話からその経済成長期に於けるコマーシャル撮影の背景、そしてポーロニヤ、フィレンツェ、ローマなどの各劇場に於ける演劇文化に触れる舞台装置の解説などを交え、とても楽しい授業でした。取り分け'60年代に見るTVに於けるコマーシャルの発展は、イタリア人の大衆文化の移り変わりを垣間見るようであり、日本と同じように戦後復興から成長して行くイタリアを感じる事が出来まし

た。しかしいざ提出課題となると、それは出入りの多いフィレンツェ・アカデミア入口から入ってすぐの中庭に面する建物の全体像一式を製図にするとといった内容であり、それは壁や窓、柱の一つ一つの寸法を取り、縮尺することとなり、私一人でそれを行うことはとても難しいと考え断念致しました。⑯舞台衣装学。その先生は嘗て日本へ来られた際に天皇陛下と御挨拶され、一緒に観劇されと言われた通り国際的な活躍と業績を残された女性であり、私がアカデミアのバカンス中、N・Yの美術学校へ行くと告げると、先生が私からもN・Yに宜しくと言っておいてと笑顔でおっしゃられていたことを思い出します。映画そして演劇監督、又オペラの記録映画の監督として知られるやはりトスカナ州出身のフランコ・ゼフィレリ氏の作品等に代表される史劇の衣装の仕事をしてきた方で、授業では各年代の衣装に於ける考証、特徴等を各生徒に分担させて研究する物でした。私もルネッサンス後期に掛かるドイツ傭兵隊ランツクネヒト（今にして思えば、彼らはローマを破壊しSacco di Roma次にメヂチ家の教皇と手を結び、今度はフィレンツェ共和国を襲い、あのルネッサンスからマニエリズムに移り変わる切っ掛けを作ったのですから余りフィレンツェ人にとっては余り有難くないテーマでした）の衣装像を文献から写し取り、その特徴の解説を伴う色彩の有るデッサンにし直すというのが課題でした。そしてその口頭試問の当日、やはり東洋人の私に取って西洋人の歴史の大きな一部である衣装学をたったの1年で学ぶということに対し、その内容として余りにハードであるということから、先生はルネッサンス期のとても解り易い問題を私に与えて下さったのにも拘わらず、私は余り満足に解答することの出来なかった私自身に腑甲斐無さを感じ、又この授業の内容とクオリティーそして先生に対する敬意から、試験の後、その旨を言い、私には単位を与えなくて結構ですと付け加えました。そしてバカンスが終り、又N・Yから帰りこの教室の前に立ってみると、その白い扉の目の高さには赤い一本のバラが献げられており、程なくして先生がイタリアの祝日である「女性の日」に自殺されたことを知りました。はっきりとしたその理由はやはり解りませんが彼女のこの分野に於ける情熱とプロフェッショナルな姿勢、そして優しい教師像は今でも脳裏に刻まれております。マス・メディア論のコラッディーニ先生も含めて紳士的で本当に威厳を持ちながらも繊細で寛容である彼らの人間像、教師像は私にとっ

て本当に良い勉強となりました。年々教師を敬う土壤のなくなって来た日本に於いても、本物の教師とは、かくもタフでそれでいて心の肌目細かさをも合わせ持つという姿勢が大切であると実感しております。⑮ブロンズ鑄造実習とはイタリアらしく、ろう原型を用いて、各自様々なテーマを持つ塑像を制作した後、それをブロンズに取る過程を学ぶ授業であります。狭い工房、多い希望者、そして職人肌の先生に因る物なのか、何となくいつも殺気立っているイメージが有りました。私も日大芸術学部在学中、土谷先生の紹介により、埼玉県のやはりろう原型を作って鑄造する工房兼造形教室に通っていたことから特に関心が有り、しばしばこの実習の工房にも潜り込みました。以上三つの課目が私が単位を取ることの出来なかった物であり、今度は毎年度に於ける必修科目①、②、③へと進みます。①彫刻に関しては粘土による塑像と人体デッサンによる、一年から四年次まで正にアカデミックな内容の課題がベースとなりました。それは各バカンスが終るとすぐに人体デッサンを始め、学期中を通してモデルがポーズを取っております。すると学生は暫くはデッサンを行い、次に塑像制作を始めます。そして人体に興味の無い者は各自様々なテーマ、様々な素材による制作へと移って行きます。ある意味とても自由であり、途中フマーズィ先生が各階段に於いてそのコメントを残し、最終的には作品の質、個数等で採点して行きました。驚いたことに授業内容が各学年同じであることや、その上担当する先生もやはり、フマーズィ先生一人なのです。実際アカデミアには二つの、二人の先生によるそれぞれ1年から4年生までの教室が在り、生徒はそのどちらかの教室を選び、通い続けるのです。この二つの同時進行している教室同志は不思議なことに余り連絡も、交流も無くそれぞれが別々の一家という感じでした。というのもそれぞれの先生の教室には二部屋ずつしかなく、それぞれの1年生から4年生までが一緒になってその二部屋の中で制作していたからです。アカデミアを制度、内容は大学と同じであるにも拘わらず敢えて職人養成校のような美術学院と呼ぶのを見ても解るように、そこにはフィレンツェの偉大な工房、例えばペロッキオ、ギランダイオの工房のような徒弟制度の空気、名残りが在ったのかも知れません。そして私が4年次になった時、この貴族的で自由な雰囲気教室に与えて下さったナポリ人のフマーズィ先生がローマ・アカデミアのエミリオ・グレコもしくはペリクレ・ファツツィーニ

教室を引き継ぐこととなり、代わってローマからリベラトーレ先生が来ることになりました。(彼のブロンズの小作品が箱根彫刻の森美術館に展示されています。)しかし、このリベラトーレ先生はこの移動がとても心外だったようでフィレンツェ・アカデミアの我々の教室に就くやいなや早速、前任者のフマーズィ先生を糾弾する書類にサインをするよう、我々生徒全員に求めました。どう見ても苛立った、高圧的なリベラトーレ先生に対して我々はまだ先生の人柄を知らないこともあり、先生に対して最悪の評価しか持ち合わせていなかったのにも拘わらず、こっそりといつの間にかその書類にサインする者も現れ、イタリア式处世術、その単位を取る為のマキャベリズムに驚きました。そして次にローマ・アカデミアに戻ることを断念した先生は、自身が抽象作家であることから、生徒の具像作品には一切評価を与えないと宣言し、又我々を驚かせました。このように例えば日本で考えられる常識や良識はイタリアでは時としてあつという間もなく吹き飛んでしまい、逆にこのような強い、生のままの個人の個性を様々な場面で受け入れて行かなければならないのです。日本と違ってイタリアでは責任の所在がはっきりしない、はっきりさせないといった要素が在り、日本のように絶えず責任が連いて廻り、ある程度その責任がどこかに留まるといことから個人の裁量の範囲は狭まるのに対し、イタリアでは責任が軽い分、逆に個人の裁量はとても大きいように思われます。平たく言えばリラックス出来るとこの事からも言えるでしょう。相手の自由を認めることで自分も自由になれるのなら、何も慎ましくしていることもありません。これが自由の本質かも知れません。②美術解剖学では人体の骨格や筋肉の仕組みを毎回、部分部分その名称と役割を覚えて行く授業であり、意外にも美術作品に見られる、それらの表現を検証するといったこともなく、レオナルド・ダ・ビンチのようにその両方に長けた先生が授業をしたらさぞ面白いだろうとは思いましたが、ここでは医学関係の解剖の先生が淡々と各部分を解説して行くだけの授業でした。ところで何でも出来ると言っても良い位に、各方面で活躍したルネッサンス人。ここではその説明を省きますが、どうして日本人はそのような多方面に渡る才能を信用しながらないのでしょか。一つの事を一生続けて行くことに拘泥り、何でも屋というような言葉が在るように一生で色々なことに挑戦する人達を嘲笑する気配が有るように思われます。そのような中、毎回講座

としてこのようなルネッサンス人を紹介する時は痛快な気持ちが致します。又これもイタリアらしいなと思ったことで、イタリアのサッカーのナショナル・チームの前監督が実はサッカー選手としての経験はなく、戦略家としてのその才能を特に買われ、そのポジションに抜擢されたと聞き、その人選の柔軟さに驚きました。③美術史に関してはやはり古代ローマ、ギリシアの美術史がそのメインであつて、それ以外の美術史としてバルビゾン派の画家達とターナーの絵画に少し触れただけでした。何故ならそれ以外の美術史は各特別コースの授業内で補って行ったからです。一般的にイタリア人が他国の歴史や地理に関して殆ど無知であると言われる理由に、中学、高校に於いても又歴史といえややはり古代ローマ、ギリシアの歴史が大半を占め、それ以外の歴史を時間不足から学べないとのことでした。そのことより、日本語と中国語が別の語学であつたり又両国の歴史や文化がそれぞれ独立して発展したことも、高校を出て教育学部に入り日本語学科、あるいは中国語学科に入りやっと知られるといった有様でした。よく日本とイタリアの文化交流の名目の元、日本の伝統芸術や芸能をイタリアで紹介する機会が設けられますが、お隣りのフランス革命の歴史も怪しいイタリア人にとっては日本の予備知識が乏しいこともあり、多分、相当断片的な情報の一つとして映っているのだろうと思ひました。④教育学はボローニャから来る幼児教育法の先生による、子供達の成長、発達期に於ける教育法について、様々な事例を用いて解説する内容であり、私自身も現在保育専門学校に於いて保育士になる生徒達に図画工作、造形・表現の科目を担当することから、たびたびこのボローニャの革新的で人間味に溢れる、子供達の個性と創造力を尊ぶ教育例を引用します。そしてやはりこの頃、トスカナ州出身の新進監督ロベルト・ベニーニも早速このボローニャの取り組みに注目し、彼の映画の舞台に彼の地の幼稚園を選んだほどでした。⑤写真学ⅠとⅡはⅠの単位を取らない限りⅡへ進むことの出来ない科目であり、その内容はまず最初に写真家の先生が生徒達に断ることから始まりました。それは私にカメラの種類や構造を聞くな、フォトジャーナリズムに関しても聞くなと始まり、いよいよ写真芸術の表現から見た各写真家の作品例を生徒達にスライドを用いて見せ、解説を加えて行くというスタイルでした。ヘルムート・ニュートン、マン・レイ、アンリ・カルティエ・ブレッソン、そして私の大好きなエドワード・ウ

エストン、ロバート・メイプルソープ、そしてシンディ・シャーマン等殆ど有名な写真家の作品を一通り紹介する上にイタリア、ヨーロッパに於ける実験的もしくは歴史的な作品をも解説しました。イタリア人の写真に対する情熱は思いの外高く、例えばベネトンの広告に使われる写真は時として強烈なメッセージを放つ物があり、戦死者の衣類、漁船のマストの上まで鈴生りにしがみついているアルバニア難民の姿そして各人種の三つの心臓が並列して配置されたその下にYellow, white & Blackと書かれ、それは人種差別、偏見に対するストレートなメッセージであり、その写真が大きな壁のポスターとなり、市バスの窓からなども至る所で目に飛び込んで来ました。すると私の横にいた一人のSignoraが「ああ、東洋人の心臓はちょっと大きいね」とコメントしました。そんなある日、一つの新聞の投書による記事から、あの有名なベネトンの写真のトリックに隠された一つのメッセージを発見しました。その写真とは各異人種が連なって立つ、肩から上のクローズアップによる物で、その作品を目にしたあるイタリア人がその作品を見る度に気持ちが悪くなるといった内容の投書がありました。何程、私もそのあちこちで見掛けるその作品には何か違和感、不自然な物を感じていましたが、ある日それが各モデルとモデルとの距離に理由があることに気付いたのです。それは恰もモデル達がおつかり合い、一つになっているように彼らの配置は不自然に近過ぎるよう、手を加えられていたのです。そしてこのことから異人種間に於ける距離の無さ、より近く、もっと近くこそがこの写真のメッセージだったと気付きました。そしてこのことから私は良い写真作品に関して、彫刻や絵画のようにストレートな感動とは違った、その写真作品特有の磁力を感じ取るような見方をすることを学びました。さて先程の投書にもう一度立ち返りますと、気に入らない人種を嫌いだということの何が悪いのか、言わないことの方が不自然じゃないかといったような何でも物の言える環境で暮らすことは、日本での考え方や、物の見方までも自然に規定され、又保護されて育った者にとってはその感性に於いても、急に広い海の中に放り出されたような気がしました。ねばならないということは、実は何もないのだというように一端身に付いたマニュアルをリセットし、再び自分自身の良識に立ち帰るということはコスモポリタンへの一つの通過儀礼かも知れません。親しき仲にも礼儀在りということから、長年に渡り私を支えてく

れているイタリア人に礼を言うと、その友人は私にいつも「友達へのありがとうは一回だけで良い」と言い、私は私の父と同じ年齢の彼をファースト・ネームで呼ぶのです。(そうでなければ距離を置いていることになります) このように所変われば品変わるといったように、もう一つ大きな違いをこれから留学を希望される方に申し上げます。それは日本での会話のマナーとして、相手が話をしている間、割って入って口を開くことは窘められるような行為とされていますが、イタリア人は感じた途端、相手の話をじっと最後まで待つ事もなく、どの時点でも自分の話を始めます。そして言葉と言葉、意見と意見を重ね合わせて議論や同意へと導きます。それはきっと感じた時に話を始めることがより自然な行為として、沈黙や辛抱することがこの場合、退屈していると相手に表明しているようになるからでしょう。こんな言葉の重ね合いを聞いていると、メロディアスなイタリア語も手伝って、事に因るとオペラの本質はここに在るんじゃないかと考えました。各場面に於ける複数の登場人物による感情と感情のおつかり合い、そしてそのメロディアスな言葉、カントによるオーバーラップそんなことから厚みの有る感情劇となる筈です。或る極端な例えとしてよく西洋人は動物的、日本人は植物的などと耳にして久しいですが、これを両者の感情表現に当てはめて考えると、それはあくまでも西洋人の尺度に因りますが、植物的イコール死んでいるといった意味になります。この植物的であるという言葉のニュアンスの重さに私はある種の戦慄を覚えた程でした。⑥マス・メディア論。それはイタリア語でもマッサ・メーディアと我々がイメージする意味に変わりはありませんが、この授業に於ける先生の意図は大衆文化に繋がるインダストリアル・デザインの歴史、考察であり、報道、ジャーナリズムの類いのマス・メディアとは違いました。媒体、なかだちをする物としてデザイナーの意図と消費者の意思との間に介在する物としての工業デザインといった位置付けでした。この観点からコラッディーニ先生はまずは解り易く椅子のデザインの歴史を淡々と始められました。プロイヤー、マッキントッシュといった一般的に知られている物から古代遺跡から発掘された椅子まで比較され、その足の数、取り付け方法、各装飾の時代背景、そして現代の意匠について解説されました。本物の知性を携えた繊細で穏やかな先生でしたが、一見すると生徒に対して怯えていらっしゃるかの如く、絶えず生徒に対して敬語で接しられ、

しかしそれはやはり生徒一人一人に真摯に向き合うという、先生の生徒に対する敬意の表れでありその姿は内容のある真に素晴らしい教師像の一つでした。或る日の授業中、やはり工業デザインの歴史の解説中韓国のDaewoo社の大衆車ポニーについて話を始められました。しかしそれは暫くして、アカデミアでも年々増え続ける韓国の学生を気遣い、イタリア人学生達への韓国という国の啓蒙であることが、言葉の端々から読み取ることが出来、又しても先生の人間性に深く感動しました。個人主義の国では、意識して知識を積む者と、或いは全く意識すらしない者の言動の格差はとてつもなくあり、私がアカデミアの図書室にいる時も、貸し出しのカウンターの職員に学生証を見せ、大きな声で「コレア？コレアって一体どこだ」と言われている隣国の学生を大変気の毒に思った経験があります。前述の通りフィレンツェ・アカデミアでも日本人の留学生と同数か或いはそれ以上といった韓国の留学生が在籍しているのにも拘わらず、知識を広げる意識の無い一般のイタリア人にとっては韓国という国は未だ未知の国であり、横をキアやダエウー、ヒュンダイが走り回っている状況でも確かにそれ以上の情報は彼らの日常生活には必要なく、それは日本に関する情報も同じであり、歯痒い思いは日常茶飯事でしたが、当時学生、まして留学生というある種、上京者のような私にはこの道理が解らず、これはイタリア人の限界などと憤っておりました。果して文化は高い所から低い所へ流れるのでしょうか？この余りに短絡的で素朴な問いかけを日本で私の伊語教室のオペラ歌手の生徒に話した所、彼女は猛烈に怒りました。その怒るエネルギーこそがきっと正しい答え自身なのでしょう。そしてこのマス・メディアの授業後、私は早速コラッディーニ先生の元へ、和伊辞書で調べた*premuroso*（気配り、配慮）という単語と共に駆けつけ、先生の心の優しさに対して同じアジア人として感謝していると告げました。そして近年、私もデザイン専門学校や保育専門学校に於いてアジアの留学生を受け持つことがあり、このコラッディーニ先生から学んだことが私の大きな支えになっていることが解ります。教師というのは、その学問の内容と又それ以上にそのあるべき人間性をも若い生徒達に伝えていくべきであると言う事をこの授業からも学びました。⑦修復学これはウフィッツィ美術館の修復担当の専門家がスライド等の豊富な資料を用いて、主に絵画の修復過程を丹念に解説して行った授業でした。国の文化事

業の大半の予算がこの修復分野へと振り分けられざるを得ないイタリアでは、この分野の成熟度はとても高く、やはり現在、私の伊語教室に通う女性の生徒もフィレンツェへ紙の修復技術を学びに行く準備中です。というのもフィレンツェでは記録的なアルノ川の氾濫が前世紀にあり、川に面した古文書館が甚大なる被害を受け、このことから、特にこの分野の修復技術も発展したと聞きました。⑧絵画技法ⅠとⅡでは、取り分けジョットの作品に使用されたフレスコ画の画材を研究をしました。驚いたことに、現在でもこの当時と同じ顔料を大聖堂ドゥオーモの近くの画材屋*zecchi*で手に入れることが出来、当時と変わらぬ製法で作っている職人がいるとのことでした。Ⅱの方ではマニアリズムの代表作家の一人であるポントルモに関するレポートを提出しました。それは彼の作品上における円の連続をトレーシング・ペーパーに写し取り、彼独特のデッサン構造に注目した物でした。この絵画技法の先生も留学生に対しての配慮を持った方で、ある日、順番待ちの日本人留学生を探して鑄造の先生が突然、ノックするやいなや授業中の教室に入ってきました。そして居並んだ我々生徒達に向かって「鈴木とかいう中国人はいるか？」と大声で尋ねました。すると絵画技法の先生がその名前を聞き「それは日本人か、中国人か？」と彼に聞き返し、鑄造の先生は「日本人」と答えました。すると絵画技法の先生は「中国人というのは中国の学生を指すのであって、日本人の学生は日本人だ」と諫めました。これは鑄造の先生が日本製のオートバイ名や、プッチーニのオペラ、マダム・バタフライにも鈴木という名前が登場するように決してその名前が日本人であると解らなかつた訳がなく、ただ中国人という単語を東洋人という意味で使ったことからこのやり取りは始まったのです。実際、不思議なことに東洋のという意味でのオリエンタリーという形容詞は良く目に触れますが、やはり同じ綴りで東洋人という意味での名詞に使われることは日常では殆ど皆無であり、アジアティチというアジア人を意味する単語も辞書に載っているのにも拘わらず七年間の留学中一度も耳にすることがありませんでした。替わりにこれら東洋人、アジア人を表す単語が一貫してチネズィ（中国人）でありその無神経さ加減に多分、多くのアジア人留学生（中国人留学生を除く）が辟易していることと思います。これはN・Yでも同じ傾向があり、ひいては白人社会の文化的特徴の一つと言えるでしょう。このような日常的に飛び出す。普

段彼らが何気なく使っている言葉の裏に隠れた偏見や差別、無知や思い上がりはマルコム X がその米国語に指摘するようにやはり伊語にも存在します。黒い仕事という言葉から不正な、汚い仕事、黄色という形容詞からはミステリアスな、犯罪的ななどというイメージまで使うことが一般的です。そして黄禍論という単語も辞書にはすぐ隣に載っているのが解ります。それに対して白という単語はイノセンスだの無垢、汚れのないことなど白でなければどうしてもいけなかったのかと思う程です。「江戸の生まれぞこない金を貯め」のようなひねりがあれば救われますが「白の生まれぞこない何やら何やら」というように普段から、これら黄色だの、黒色だのの悪い意味での使われ方が余りに頻繁に日常会話で出くわすとなるとグローバル化に取り残された。現存する中世的な土着文化とはこれら言葉の意味合いに残っているんじゃないかと勘繰りたくもなります。最後にもう一つ、かくも普通に、真顔で大きな犬と小さな犬とでその脳の優秀性の違いからそれらの区別が出来るということから当然同じ様に人類の種類にもその区別＝差別を当てはめることが出来ると言い放った青年の顔が忘れられません。こんな馬鹿げた若者を前にして、アーティストは絶えず弱者の味方といった程度の理念しか持ち合わせていなかった私は恐怖を覚えました。(きっと先程の青年の言ったことはナチス或いはファシズムの思想の引用だったのでしょう。その解り易いが故のロジックに悪魔的な物を感じます。) 一人の有名な画家がヨーロッパ一周の旅から帰り、世界を一周したと言い切ったことを伏線としてアメリカ大陸を新大陸、ヨーロッパを旧大陸という呼び方を耳にして、東洋人の私にはその響きから改めて歴史を感じました。(人類の歴史とは決してヨーロッパ人だけによる歴史ではありませんが、今日我々が目にする歴史とは、きっと彼らが書いて来たのでしょう。N・Y のメトロポリタン美術館の展示作品を見て、世界中の様々な文化による美術品の格付けに、そのバイヤー達においてどの人種が優勢なのかと考えた時、自とその比べようのない筈の人類の遺産である各美術品の格付け方が解って来ました。) 所で私がイタリアに着いた頃、日本はバブル期の後半であり、まだ日本に活気があった頃でした。その状況を知人のイタリア人に話してみても、今はそうかも知れないけれど、果してこれからどうなるのかねと冷やかに言われたことを思い出します。そしてヨーロッパを振り返って見ると歴史上、様々な分野でそれ

ぞれの国が一番であった経験を持っていることに、後れ馴せながら気付きました。産業革命、バイキング、ローマ帝国、ルイ王朝などその栄枯盛衰を陸続きの国としてやはり識っていたからこそその後の日本も予想出来たのでしょう。⑨現代美術史ⅠとⅡ。この講義は近年、日本で紹介されることの多くなった現代イタリア人アーティスト及びその作品を検証して行く科目であり、マンツォーニ、ブッリ、マリオ・メルツ、ヤニス・クネリスからルチアーノ・ファブロ、バンジー等を学びました。先生は見るからに精力的で外見はフランシス・フォード・コッポラ監督(イタリア系アメリカ人)の映画“ゴッドファーザー”に登場する一家の一番最初に射殺される長兄役といつもだぶって見えました。明快で押しの強いトーンの伊語で今日私もつつい私の伊語の授業でも真似をさせていただきます。情熱という物は(例えば怖い形相の先生でも)生徒に伝わる物で私もこの先生の授業が大好きでした。一週間に曜日を変えて二回行う同じ内容の授業をその一回だけを出席すれば良いのにも拘わらず、その二日共に出席し、細かく先生の言われたことを全てメモに残して、家へ帰り辞書で単語を調べて見ると、画廊の依怙鼻根などと伊語の勉強中には出くわさなかったような単語にしばしば当たり、つくづく生きた外国語による美術の授業を受けていることを実感しました。⑩演劇史ⅠとⅡ。この授業はローマから毎週通われている先生によるローマ弁で優しくぶつぶつ語られる姿が印象的でした。フィレンツェからローマとは反対方向にあるボローニャ市の劇場設備は優れた物が多く、その理由の一つにこの街が工業都市であることからイタリア共産党の地盤であり、そのことから文化系社会設備が(例えば画家モランディの美術館など)が充実しているとその講義中に知りました。確かにボローニャは南北の経済格差に端を発する南の労働者達が北の各都市、例えばジェノバ、トリノ方面、モデナ、パルマ、ミラノ方面そしてベネツィア、トリエステ方面へと南からボローニャを分岐点として各方面へと赴きます。弱い立場である彼ら労働者達の支持を受けたイタリア共産党の歴史は、その中心人物ベルリングエル氏と共にやはりイタリア近代史において無視の出来ない項目の一つであることも現地で知りました。イタリア映画史においても、ベルナルド・ベルトルッチ監督による“1900年”という作品の中で地主と小作人による階級闘争の歴史が描かれています。そして日本のニュース番組では主な出来事の紹介の後すぐにス

スポーツ、ほぼスポーツだけという番組構成を採っていますが、イタリアのニュース番組ではその間に限らずカルチャーを紹介する時間が設けられ、各美術の展覧会の紹介、演劇、映画、音楽、文学といった注目すべきカルチャーをいち早く紹介します。その為実験的な演劇作品でも一般にその活動、公演の情報がTVのニュースを通じて知ることが出来、そのことからイタリアの演劇界は日本のそれに対してより一般的に浸透していると言えるでしょう。①彫刻技法IとII。それは主に石を中心とした、各素材の成分を正に化学的に分析するという内容の授業で在り、その授業のタイトルから想像出来る、或る彫刻作家、或いは職人が彫刻の技術を教えて行くといった物ではなく、地質、鉱物学者である先生がその成分の図式、特徴を解説するといった内容でした。ある日、'50年代～'60年代の水俣病やイタイイタイ病について'90年代日本を紹介する公害病として引用されたことがあり、授業後先生にその時代背景や後遺症について話をしたことを覚えております。②大理石による実材実習。この授業は後に名古屋造形芸術大学において、やはり同じ内容の授業を受け持つこととなり、大変役に立った科目でした。その当時私は、余り広く知られていない。教会の柱にある装飾細工の職人であるティーノ・ディ・カマイーノの作品が大好きで、どんな教会へ行っても、見上げるとすぐに彼の大理石による作品であることが解る程、その姿は愛らしく、優しく、とても人間味に溢れた作風であり、そのことをこの大理石の授業の先生に話をした所、とても嬉しそうに頷かれたことを思い出します。フィレンツェ・アカデミアはミケランジェロの作品を多く所蔵する美術館に隣接していることや、多くの講義が行われる大講堂内にもミケランジェロの奴隷群像やミラノにあるロンダニーニのピエタ像などその同寸の複製像が居並び、片手でそれを触りながら授業を受けることが出来る程でしたので、やはりミケランジェロについての解説には取り分け熱が籠もっていました。実習の方は砂を敷き詰めた木製の四角の升を、作業のし易い高さの台の上に置き、各自テーマの違った作品を立ったままの姿勢で、各種先端の形状の異なる鉄製ののみで彫り分けていました。良い作品になると、例えその制作途中でも盗まれるといったこともありました。フィレンツェには、ウフィッツィ、ピッティ、バルジェッロなどの有名な美術館がありますが、又多くの小規模な美術館やコレクションも点在し、そこでは殆ど入館者がいないこともあり、

作品をゆっくり触れても良い位いに近くで見ることが出来、後でその作品の名札を見て、ルネッサンスの巨匠の作であることもあり、驚いたことがしばしばありました。毎年イタリアで多くの美術作品、例えばエトルスク時代の物などが盗まれて国外へ流出したというニュースが掛かりますが、このような人気のない小規模なコレクションから盗まれるのだろうかと思いました。③企画、デザイン学。この授業は現役で活躍する二人のインダストリアル・デザイナー達によるデザインの歴史からその特徴を解説し、(例えばバウハウス、イタリアのデザイン・グループメンフィスなど)最後に各自、携帯電話のデザイン企画のプレゼンテーションからそのモデル作りまでを行いました。私はオーストラリアの先住民、アボリジニーのプーメランにヒントを得た携帯電話を企画し、マーケットを造ったのを覚えています。この授業に関してまず何よりインパクトのあったことは同時に二人の先生が教卓に並び、対等に授業を進めて行くというスタイルで、その内のどちらかが解説を始めると、もう一人の先生がコメントしたり、時には彼ら同志でディスカッションを始めるといった結果的に、とてもリラックスした幅の広い授業になっていました。その為、採点時も二人の異なった角度によるコメントも聞くことが出来ました。現在私とイタリア系クロアチア人である妻と一緒に各文化センターやオープン・カレッジ等で二人同時に出席する授業を好んで行うのは、この授業のスタイルから学びました。そしてこの携帯電話のデザイン企画、モデル制作において、この今回のイタリア留学中、最も大事なことを学んだのです。それはデザイン企画において、使い易いとか、便利だとかをまず先に考えるな、それより前に純粹に美しい物を考えろといった内容でした。確かにドローイングやデッサンでも煮込み過ぎたミネストローネであっては新鮮さを失います。その為、良い時点で終わらせ、次のドローイングに取り掛かり、それを繰り返すことから自然に内容があるまま、程良い時点で終わらせることが出来るようになることを私はN・Yで特に意識して没頭していたことを思い出しました。形の美しさ、デザインの新鮮さにこそ本当の焦点を合わせるというこのアプローチは一般的な日本人のアプローチとは違うなと思いました。'80年代ランチア社にストラトスというラリーで大活躍をした車があり、私もトリノのフィアット社内の自動車博物館内でその実物を見たことがあり、階段の下に展示されていたその車の異様なプロポーション

にやはり足を止めたことも記憶しております。その車の原型であった車は確かスフェーラという名の車であり、デザインの美しさから扉も無く、何とフロント・ガラスから車内に入ると聞きました。又この話の論点からはずれませんが大戦中の戦闘機アエル・マッキは完成後、左右のバランスが悪く結局、片側の主翼の長さを延ばし、その配分を合わせたとも聞きました。しかし、やはりこの戦闘機も伊達者と呼ばれる程美しく、結果的にこのような大胆な帳尻合わせが必要だったのかなと考えました。美しさへの情熱、その混じり気の無さこそがイタリアン・デザインの真髄だと悟りました（そしてプラス簡潔性）。又イタリアでは気違いといった言葉は日本でのその言葉に対するイメージの枠を越え、良い意味をも併せ持つことにも気付き、天才と紙一重の例を待たず、やはりイタリア人は天才を愛する国民だと思いました。又赤色に対するイメージも日本とは違い、共に血を連想させることに違いはありませんが、日本の不吉なイメージと打って変わって、それは健康で血の通ったイメージから、車の色に置き換えると信頼出来る、タフなというイメージに変わります。又ある日、アカデミアの知人の展覧会を観終った後、側にいた友人に、私は嫉妬を感じると言うと、彼はそれは良い嫉妬だよと言われ、その言葉に悪いイメージしか持ち合わせていなかった私は、言葉の束縛から解放されたように思ったこともありました。ところでこの論文の留学準備の段階で書いたイタリアの良い加減（いい加減＝よい加減）とは、頭の前から足の先まで寸分たがわずコーディネートされた着方より、ちょっと外した（イコール自由な）着崩した着方の方が、それを見る相手に印象を残す着方であると言うように、イタリアはその国自体、国全体が着崩しをした国と言えるでしょう。敢えて着崩すとは、几帳面な日本人やドイツ人にはちょっと出来ない芸当です。しかしEUに入るまでは食料品には税金は掛かりませんでした。高速道路の料金は日本のそれに比べて無料に近いです。国債の格付けでは日本の遥か上です。出生率も回復しました。それでいてあのイタリアのイメージです。イタリア人の考え方を上手く表す例え話があり、私も伊語の最初の授業の日によく使います。それはゴルバチョフ書記長がローマに到達した際、沿道のイタリア人は盛んに彼に対して拍手を送りました。しかしそのイタリア人達が頭の中で本当に、或いは同時に考えていた事とは、今晚、誰と、どのピッツェリアで、どのピッツァを食べようか

だったという話であり、これは普段、古代ローマの史跡の近くでスクーターに乗り、恋愛をしたり、仕事をしたりと生活を併にしていれば、自ずと人間の一生の短さ、儚さを感じざるを得ず、それが故に陽気に一生を生き生きと生ききろうとする思想が生まれるのだというのがこの話の真理でした。彼らの歴史の偉大な遺産を考えれば、僅か何年かの大戦の為にそれらを破壊することになるのなら、さっさと途中で方向転換した方が良いというのも頷けます。

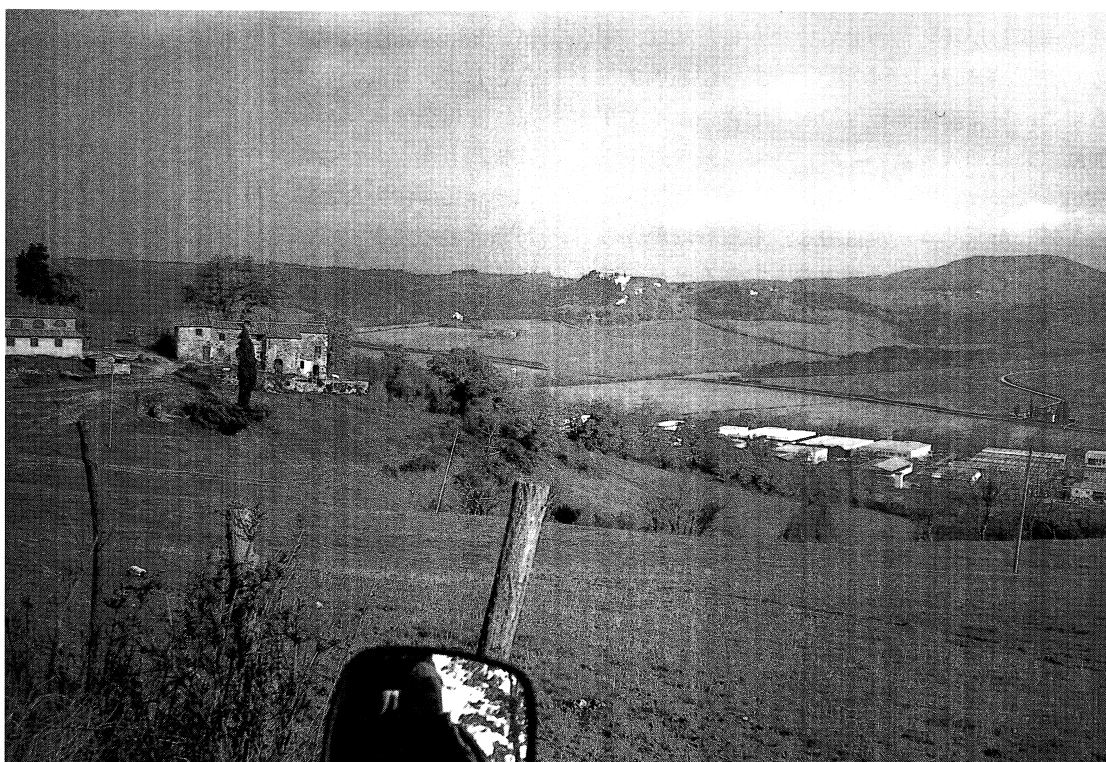
そして最後に私は1年間を掛け、資料を求めて日本にも帰り、アカデミアに提出する卒業論文に取り掛かりました。初めの論文は4年次に、N・Yで感じ取ったアンディ・ウォーホルによるコマーシャル・アートからビジネス・アートへの変貌をテーマにした物を西洋美術史の、やはり二人で授業を行われる先生達に提出しましたが、一人が良いと言われると、もう一人がNoとなり、今回はこの逆といった状態が繰り返すこととなり、ある時点で提出する先の科目を替え、論文のテーマをも又新しく、日本文化を題材とする物と書き改め、この二つ目の論文である

“Gli strumenti di comunicazione nel Giappone antico e moderno (Gli stemmi di famiglia dallo scintoismo al buddismo) ; 古代から現代日本における伝達の道具としての神道から仏教に至るまでの家紋のデザイン考証”を尊敬するマス・メディア論のコラッディーニ先生に提出しました。このアカデミアに論文tesiを提出するに当って面白いなと思ったことは、論文の中身の充実は特論大事ですが、その外側、つまりその装丁方法、読んでもらう工夫としての装置、意匠にも拘泥るといったことが出来、クラシックな行事にも、絶えず別のアプローチを試みるイタリア人らしい取り組み方や採点基準がありました。例えば卓上のページをめくるブロック式の電話帳のように摘みを回すと、パタンパタンと論文が読んでも行けるような装置を作ったり、論文を壁に投影して行く物など様々な工夫を凝らした物がありました。

こうして途中、トリノからフィレンツェへアカデミア内を移動し、又そのアカデミアを飛び出し、一人で学外での制作活動を始めたり、フィレンツェにある私立のデザイン専門学校やN・Yの美術学校へもそれぞれ1年間通い、日本を出発して7年目の'97年11月にイタリア政府、ローマが発行するディプロマを取得し、私の留学生活は終わりました。呑気としか言いようがありませんが

20代の私には本能的に30才までは異文化、或いは情報の渦の中に身を置こう、当時の私の言葉にすると混乱の中にいたかったという思い込みがあり、結局33才になって日本での生活を再出発しました。年齢の中途半端な外国人のようで、友達が私に向けたインチキ日本人という言葉に笑い、事実そうだなと思い、責任を負う仕事の場面に於ては特にそのズレに注意を払って来ました。これは帰国してすぐの留学生がそうであったように、今では、もうズレとして意識すらもなくなり、今度は逆に私のバック・ボーンとなりました。しかし日本へ帰って暫くの間、私はイタリア語を忘れてしまうことを恐れ、日本語で書かれた書物を意識して避けていたことを今思い出すのと同時に、やはり暫くの間まだ自分が外国人のように客観的に母国を見れる内に、その印象を言葉に残そうと真摯に考え、そして思い付いた形容詞がヒステリックであるといった表現でした。ヒステリックな国。この症状から知らず知らず惑わされていかないよう、若い

世代の生徒達に対して、例えばデザイン専門学校では時代を越えても変わらないもの、変わらないこと、保育専門学校では、大らかに幼児の話をよく聞き、その個性を尊重し、引き伸ばすこと、造形芸術大学では敢えて手間の掛かる素材による、長きに渡って見てもらえる作品の制作、イタリア美術史や語学の教室では、言葉による表現や文化の違いから見たイタリア人の物の考え方、感じ方までを含めて解説します。このイタリアと日本、或いは二つの文化の隔合というものはありません。他文化を識る、手に入れるということを表現するに当たって arricchire (リッチ、豊富、一杯にする) という言葉でしか当てはまらないことからそれは明白です。多分それはそれを体験した一人一人の個人の中では可能でしょう。というのも、より人間的であるということはどういう意味かと問われた時、嘗て私が日本の学生だった時よりも自信を持ってそれに答えることが出来るようになったと思うからです。



フィレンツェ郊外：タバルネッレのアトリエ